

## サロンでの気づき

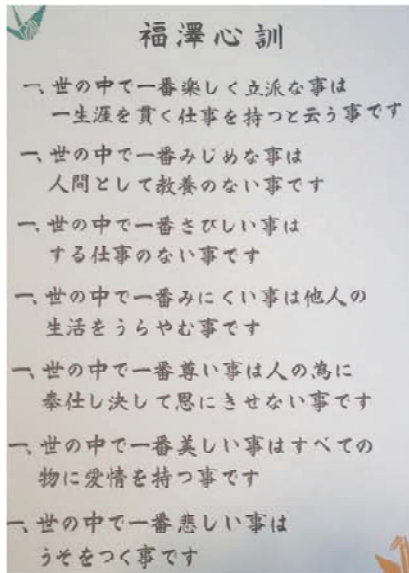
サロンを訪問させて頂き、気づいたこと、聞いたことなど、お伝えしたいと思います。何かお役に立てれば嬉しいです。

早いもので、今年もあとひと月となりました。このところめっきり冷え込んでまいりましたが、いよいよ年末の繁忙月に入ります。風邪など引かないように気をつけてください。

今月は、サロンの先生から見せていただいた福澤諭吉の心訓と、先月おすすりませせていただいた本からご紹介させていただきます。

福澤諭吉の心訓、あらためて見ると本当にいいことが書かれていますね。

こんな気持ちで仕事に取り組んでいたら食品偽装事件など起らないと思います。



「とんでもない男である。世に正直者や、志の高い人間は多いが、この男ほどまっすぐな人間はめずらしい。名は、小野鉄太郎高歩。のちに山岡家に養子に入り、号して山岡鉄舟と称す。」

この冒頭から入る「命もいらず名もいらず」読み終えました。

愚直という言葉がぴったりあてはまる鉄舟の生き方に感銘しました。心に残った箇所をご紹介させていただきます。



●ちかごろの鉄太郎は、自分の名など、どうでもよいと思っている。

なぜ、名など、どうでもよいと思うようになったのか——。そのころの変容は、うまく説明することができない。

ただ、剣の修行を積み、願翁に参禅しているうちに、大切なのは、言葉ではないと考えるようになった、とは言える。

名を揚げる——のは、所詮、他人の評判を気にすることであろう。そんなものにこだわってはい、人間の器が小さく縮こまってしまう。

宇宙界のなかでは塵芥(ちりあくた)にもひとしい人間だが、宇宙界と対峙して雄々しく生きたい——それが鉄太郎の願いだ。

そのために、何よりも大切なのは、他人の評判ではなく、信(まこと)の気持ちなのだ、強く思っている。

——信のころ。

おのれに対していつも誠実で、どこまでも本気でありさえすれば、他人がなんと批判しようと、春風のように聞き流すことができる。——そんな風に思うようになっていた。

●鉄舟にとって、「知」は、学ぶものではなく体得するものである。激しい変動のなかに身をおくことで、鉄舟は不易とはなにかを学びつつあった。

東に西に奔走し、浴びるほどに酒を呑んでも、鉄舟は、毎晩、眠る時間を削って坐禅をくんでいる。酒の酔いなんぞは、わずかに仮眠をとればすぐに醒める。

坐禅を通じて、鉄舟は、変転する宇宙のなかの不変の真理を感得しようとしている。

——変えてよいもの。

——変えてはいけないもの。

そのふたつがあるはずだ。

権威はなくなる。消えてしまう。そんなものは変えてかまわない。勝って驕(おご)れる者は、いつしか塗炭の苦しみ味わうだろう。あちこち奔走しながら、鉄舟が思ったことはひとつ。

——こころだ。

人を人として生かしているのは、おのれの精神だ。こころが貧しい者は、なにをやっても中途半端にしかできない。官軍であろうが、朝敵、賊軍であろうが、そんなことは関係ない。

こころが熟し、高き志をもつ者は、ついにことを成すことができる。波乱万丈の時代に遭遇した旧幕臣たち、また、官軍の男たちを見ていて、そう確信した。

### 一精神満腹。

なにはなくても、おれはその伝で行こうと決めた。懸命に生きていさえすれば、負けて、這いつくばり、なんの誉れがなくてもかまわない。負けることが悪いのではない。全力を尽くさなかったことが悪いのだ。だから、つねに全身全霊でことに当たる。そうすれば、満ち足りる。日々、満ち足りた精神で生きていく——。あちこちを奔走しているうちに、そんな心境になってきた。

鉄舟は、すでに三十三歳。

風雲の修羅場をくぐりぬけてきたことが、強い自信となって、腹に鋼鉄の玉でものみ込んだみたい、頑(かたく)々な信念ができて

いる。

——男として生きる。それも、よい男として全力で生き、よい男として悔いなく死にたい。腹に鋼鉄の玉を秘めながらも、春風のように爽やかに生きたい——。そんな思いが強くなっている。

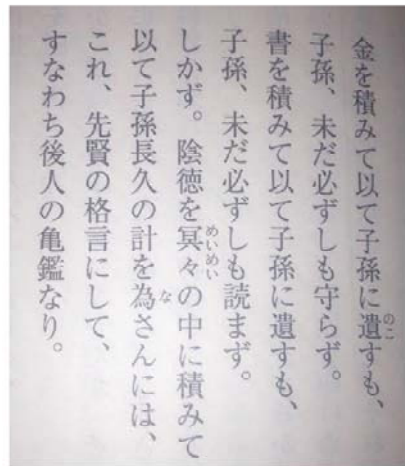


●撃剣は、人格と人格のぶつかり合いだ。

と、つくづく思う。技のなんのは、まだ初心者の段階だ。充分な鍛錬を積み重ねた者同士がぶつかり合うとき、小手先の技などは、なんの力も持たない。ただ、人格を磨いた者だけが、文字通り心身ともに、相手を制することができるのだ。禅をくんでいても、くまないときも、つねに公案が頭から離れない。

●「それでは子供たちにご教訓となることをお残し置き願いたく存じます」

請われて、鉄舟は、筆と紙をもってこさせた。



子孫のために、金を積み、書を遺しても仕方がない。子孫が長く栄えるためには、ただ人知れず陰徳を積むしかない——、と書き残した。

●生きるとは・・・。

思考ではない。

鉄太郎は感じている。

生きるとは、ただひたすら、目の前のことを、全身全霊の力をふりしぼってなし遂げることだ。

鉄太郎はそう感じている。

それこそが、人が生きる値打ちである。それ以外に、おのれの生を全うする道など、ありはしない。

そう定めると、こころが落ち着いた。なんのゆらぎもなく、大地に立っている自分を感じて刀を納めた。

### 以心伝心

あるサロンオーナーから聞きたい話です。

60代のベテランのスタッフの方が、年だしもうそろそろ美容の仕事をやめようかなと思っていたそうです。するとその時期からだんだんとお客様が減っていったそうです。同じように仕事をしているのですが、以心伝心といいますが、人の気持ちは伝わるんですね。

残り一カ月、気合いを入れてお客様をきれいにしていきたいと思います。

この本をお求めになりたい方はお申し付け下さい。商品と一緒にお届けさせていただきます。

※お届けまでに少し時間がかかります。ご了承下さいませ。